

聖書：使徒4：32～5：11

説教題：神を欺く罪

日時：2013年7月14日

聖霊の注ぎを受けて新しく歩み始めた新約の教会に、前回、初めての迫害が起こりました。ペテロとヨハネの二人が捕らえられ、ユダヤの最高議会で尋問され、二度とイエスの名によって語ってはならないと厳しく命じられ、脅されました。そんな中で教会は震え上がることなく、神に向かって、「私たちに大胆にみことばを語らせてください」と祈りました。その祈りを通して一同は聖霊に満たされ、神の言葉を大胆に語り出しました。このように聖霊に満たされた教会が示したもう一つの姿が、32節以降に示されています。それは彼らは互いに対する愛の実践においても素晴らしい特徴を示したということです。口で何かを語るだけでなく、その行ないにおいても聖霊の豊かな導きが現れ出たということです。

32節に「信じた者の群れは、心と意思を一つにして」とあります。彼らの間には愛による美しい一致と交わりがありました。そして特筆すべきことは、心だけではなく、持ち物においても、日々の肉体的・物質的必要においても分かち合いをしていたことです。33節に記されているように、力強い宣教が聖霊によって導かれていましたが、それとセットで愛の交わりが具体的になされていたのです。その結果、一人も貧しい者がいないという祝福にありました。先の2章44～45節と同じです。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいのものを共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」その状態がなお続いており、また豊かになされていたのです。

これは前にも述べた通り、共産主義や社会主義を聖書が理想としているということではありません。32節に「すべてを共有にしていた」とありますが、後に見る5章4節のペテロの言葉から明らかな通り、私有財産権は認められていました。ですから「だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた」というのは、この信仰共同体のルールだったのではなく、一人一人が自発的にそのように生きていたということだったのです。法的には一人一人の持ち物は、それぞれのものであり続けましたが、他の人を顧みるがゆえに、それぞれは自分の持ち物を自分のものと言わず、進んで他者のために分かち合う生活をしていたのです。

これは確かに非常に美しい姿です。キリスト教は外的な力で皆が平等になることを理想とするものではありません。神は一人一人みな顔形を違うように造っておられるように、その持ち物も財産も違うように造っておられます。その違いを否定して、画一的なものにすることが御心なのではなく、それぞれが与えられた違いを持って愛の交流をすること、愛によって互いに支え合い、助け合うことが御心なのです。

そんな中、36～37節にはバルナバのことが記されています。この慰めの子と呼ばれるヨセフは、後のこの使徒の働きにおいて大活躍する人です。彼は畑を持っていたので、それを売りました。そしてその代金を持って来て、使徒たちの足もとに置きました。貧しい人々に分け与えるため、使徒たちを通して適切に分配されるために、です。

ところがこうした美しい教会生活のただ中で、恐るべき事件が起こります。サタンがまた攻撃して来たのです。4章初めでは外側から、すなわちユダヤ人当局者を用いて迫害するという仕方で攻撃して来ましたが、今度は教会の内側から揺さぶりをかけて来ます。それが5章最初の記されている出来事です。

ここにアナニヤとサツピラという夫婦が出て来ます。この夫婦も持ち物を売って、その代金を使徒たちの足もとに持って来ます。彼らが売った物とは、8節から彼らが所有していた土地だったと分かります。バルナバとそっくりです。同じことをこの夫婦も行なったようです。ところがこの夫婦は大変な罪を犯したということではばかれます。何がいけなかったのでしょうか。

2～3節を読むと、彼らが土地を売って得た代金の一部を手元に残しておいたことがいけなかったことのようにも見えます。しかし4節のペテロの言葉から分かるように、それぞれには自分の財産の私有権があります。ですから、土地を売ったからと言って、全部を使徒たちのところに持って来なければならない義務はありません。

一つのカギとなることばは、2節と3節にある「残しておく」という言葉です。注目に値することは、旧約聖書のギリシャ語訳では、ヨシュア記7章でアカンが聖絶のものを「取った」と言われている時に使われていることばがこれと同じであることです。またこれと同じ言葉は新約聖書であと1回出て来ますが、それはテトス2章10節で、そこでは「盗みをする」と訳されています。こちらと同じニュアンスです。であるとすると、アナニヤとサツピラが自分たちのもとに一部を残したこの行為は、「盗み」「着服」と表現されてもおかしくない行為だったこととなります。これは一体どういうことでしょうか。考えられることは、おそらくアナニヤ夫婦は使徒たちに対し、自分たちも土地を売ったら全部、それをささげますと公言し、約束していたのでしょ。だからその時点でそれはすべて主のものであった。なのにその一部を彼らは自分たちのもとに残した。それは着服であるということです。あるいは前もって約束していなかったとしても、この夫婦が「私たちはあの土地を売って、その代金すべてを持って来ました、これがそうです。」と言った時点で、その代金は全部主のものでした。なのに一部を残したことは横領・盗みとなる。そのように考えられます。

そしてこのような着服もさることながら、ここで一番問題にされていることはウソをついたことです。全部ではないのに全部です、と言ったことです。すなわち「盗み」の罪ばかりでなく、「偽善」の罪を犯した。彼らがこのように行動したのは、バルナバの姿を見たからでしょう。また人々のバルナバに対する高い評価と称賛を見たからでしょう。そこでアナニヤ夫妻は、自分たちもそのように人々から敬われたいと考え、似たような演技をした。そして全部をささげてはいないのに、全部をささげたふりをした。実際にはそこまでの犠牲は払っていないのに、その人たちにふさわしい名声だけを自分たちのものにしようとしたのです。

ペテロはこれは「サタンに心を奪われた」ことだと言っています。思い起こすのはユダです。あの時も悪魔は神の計画を邪魔しようとして、ユダに働きかけました。そしてユダは心のドアを開けて、サタンが入るのを許しました。アナニヤも悪知恵を吹き込むサタンに対抗すべきだったのに、耳を傾け、同意し、ついには自分をサタンに明け渡してしまった。

またこれは「聖霊を欺く罪」だとペテロは言います。この偽善は正しいことでないと聖霊は示したのに、彼は聞かなかった。むしろ聖霊だつてこのことには気がつかないだろう、聖霊さえもごまかせるだろうと思った。それは神を欺くことである、と。

そんなアナニヤは、ペテロを通して自分の罪がさらけ出されると、倒れて息が絶えます。心理的・精神的にも相当ショックだったかもしれませんが、これはそれだけで説明されることではなく、神のさばきとしての死です。青年たちが彼を包み、運び出して葬ります。それから3時間ほど経って、妻のサツピラがやって来ます。ペテロは彼女に言います。8節：「あなたが

たは地所をこの値段で売ったのですか。私に言いなさい。」ここでサツピラが正直に話し、罪を告白したならまだ良かった。ところが彼女は何の躊躇もなく、「はい、その値段です。」と言ってしまった。そうでないことは十分に知っていたのに、夫との打ち合わせ通り、偽ったのです。その結果、彼女もたちまち倒れ、息が絶えます。そして夫と同じように運び出され、葬られます。このことで教会全体に非常な恐れが生じた、と最後の 11 節は締めくくられています。

私たちはこの箇所から何を学ぶべきでしょうか。三つのことを考えたいと思います。まず一つ目は、私たちも同じ罪を犯していないか、ということです。私たちも神のものを着用・横領していないでしょうか。神のものを着用する方法には二つあります。一つはささげるべきものをささげないことによってです。具体的な一つのこととして十分の一のささげものを考えることができます。日本長老教会の礼拝指針 10 章 1 節にこうあります。「ささげ物の基準として、モーセの律法の下では『十分の一』が規定されていたが、恵みがより豊かに注がれている新しい契約のもとでは、より豊かな感謝とともに、古い契約の下での『十分の一』に勝るものをささげるように心がける。」細かな適用については色々考慮すべきことがあるかもしれませんが、申し上げたいことは、私たちはささげものにおいても主のものを着用することが可能ということです。もう一つの方法は、主にささげられたものを着用することです。たとえば教会の様々な活動のためにささげられ、備えられたものを私物化することもそうです。主にささげられたものを、自分の便利や個人の利益のために費やしたり、そのために要求することも密かな着用と言えます。さらに偽善はどうでしょうか。今見たような着服の罪を常習的に犯しながら、自分は敬虔な信仰者であるかのように振る舞っていることはないでしょうか。また人々からの評価と尊敬を勝ち取るために、偽りのあかしや、外側だけ飾った行動を取っていることはないでしょうか。そうして人々を欺き、また神さえも欺こうとし、素知らぬふりをしていることはないでしょうか。このような偽善は重大な罪であることが今日の箇所に示されています。

二つ目に考えたいのは、この夫婦に下ったさばきについてです。おそらく多くの人々は、この記事を読んでショックを受けることでしょう。もう少し悔い改めのためのプロセスがあっても良かったのではないかと。これはあまりにも急過ぎるさばきではないかと。アナニヤ夫婦も、こう考えたかもしれません。神は我々のすることに気がつかないだろう。もし気がついて、恵み深い神のこと、悔い改めのチャンスと時間をくださるだろう、と。ところが実際に彼らは直ちにさばきを受けました。このことは何を意味するのでしょうか。それは私たちが悔い改めるための十分な時間とチャンスを神が与えなければならない義務は神にはないということです。ですから私たちは安易に罪の中にとどまっていたはならないと教えられます。むしろ直ちに罪を悔い改め、神に立ち返らなければならない。もし私たちがこのアナニヤとサツピラに下ったさばきを見てショックを受けるなら、それは私たちも彼らと同じ罪に陥る危険性が非常に高いということを示しています。罪はいつでもこのように扱われて当然であると思って、急いで正しいあり方へ立ち返るように導かれなければなりません。

そして三つ目は神への正しい恐れを持つべきことについてです。今日の 5 章では、そのことが強調されています。5 節：「これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。」11 節：「そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた。」時々、旧約聖書の神は厳しい神だが、新約聖書の神は愛の神だなどと言われます。しかし言うまでもなく旧約聖書の神も新約聖書の神も同じです。確かに神は愛の神であり、キリストにあって父なる神です。しかし私たちはそのあまり、この方をふさわしく恐れ敬うべきことを忘れてはな

りません。ある人は、この事件が起きた日の夜、信者たちはそれぞれのベッドの中で、その日、神がなされたことに震えていたのではないか。そして眠れたかどうかはともかく、次の日の朝には、私は自分の人生を無駄にしないように歩もう、との決心を持って起き上がったのではないか、と言います。私たちもこの神の姿に触れて、新しい決心をもって信仰生活を再スタートすることが必要ではないでしょうか。

神はご自身の血を持って教会を買い取り、教会を通して全世界へのみわざを進めておられます。そこでは神に感謝する兄弟姉妹が、神への応答の愛を持って、共に歩んでいます。その中で心と意思を一つにせず、偽善的な生き方をする人を神はよしとされません。私たちは人を欺くことができ、神をも欺くことができると思っても、本当の意味では神を欺けないのです。神はすべてを見て知っておられます。私たちはその神の前で自らを吟味し、神に正して頂きたいと思えます。そして神への愛と共に、正しい恐れ敬いを持ち、そのような者たちに聖霊を通して神が与えてくださる豊かな祝福に歩みたいと思えます。